



CONTENTS

欧州統合に対するポルトガル国民の反応	西脇 靖洋／国際文化学科	2
「文化」と「芸術」を客観視するということ	田中 啓／文化政策学科	3
ヘンデル没後25周年記念祭(1784)ー近代音楽祭のモデルとしてー	上山 典子／芸術文化学科	4
デザインという私たちの旅、その羅針盤を求めてーインタラクティブな発想による、日本の美意識の継承に向けてー	植田 道則／デザイン学科	5
井川地区におけるビジュアルデザインの試行	佐井 国夫／デザイン学科	6
カスカタレー認知向上のためのデザインによるイメージ形成提案	日比谷 憲彦／デザイン学科	7
令和3年度 文化・芸術研究センター事業実績	8~9	
公開講座 連続美術講座「視覚芸術と空間／美術と美術館」ー南條史生、藤原工、柳田倫之①SUAC 立入 正之／芸術文化学科	10~11	
静岡文化芸術大学公開講座「読」の伝来と「木」の文化ー日本の文化を創り伝える 新妻 淳子／デザイン学科		
室内楽演奏会2022「スペインの風ーフラメンコの音楽と舞踊」	梅田 英春／芸術文化学科	12

静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター

静岡県浜松市中区中央2丁目1-1 〒430-8533

●Tel:053-457-6105 ●Fax:053-457-6123 ●https://www.suac.ac.jp/

A r t & C u l t u r e



多文化・多言語教育研究センター長

下澤 嶽

SHIMOSAWA Takashi

多文化・多言語教育研究センターの開設

多文化・多言語教育研究センター（以下多多センター、内部関係者の間の愛称ですが、ここではこれを使わせていただきます）が2022年4月に正式にスタートしました。多多センターの開設の裏には、これまでの静岡文化芸術大学の様々な活動実績が統合、検証されていく経緯がありました。

まず、2013年に開設された英語・中国語教育センターの存在です。英語、中国語のネイティブスピーカーの特任教師を常駐させ、「使える英語、中国語」をめざす熱心な学生が自由に出入りできる場としてこのセンターが誕生しました。毎年約1,000人以上の学生が利用し、TOEICの平均点も伸びていきました。また、2016年からは、新しいカリキュラムとして英語コミュニケーション、中国語コミュニケーションのどちらか8単位を必修とし、大学全体の語学教科の強化を図ってきています。

もうひとつは、外国にルーツを持つ人々が多く住む浜松市の特性から、2010年より重点研究領域として「多文化共生を含む地域社会発展に向けての文化政策」を掲げ、2020年まで様々な研究と実践的な活動を展開してきました。もちろんこれより先に始まっていた協定校との留学支援事業もこれらの成果に大きな影響を与えてきました。

以上の活動の成果を合流させる形で、2021年1月、グローバル化構想検討専門部会の「静岡文化芸術大学グローバル化構想」の答申の中に、初めてこの多多センターが提案されます。そして具体的な目標として、「ICTを活用した語学教育プログラムの提供」「海外からの留学生の教育プログラムや、留学を希望する本学の学生を対象にした事前事後研修プログラム」「デザイン、アートマネジメント、フェアトレード、文明観光学等の分野における教員と学生のグローバルな活動支援」の3つを設定しています。これらを実現するために、英語・中国語教育センターを発展的に再編成し、多多センターの設置が提案されました。ここまでが多多センターが設立に向けた大まかな経緯です。

英語・中国語教育センターのこれまでの活動は多多センターで受け継がれ、4月から順調に始まっています。毎月多多セン

ター運営会議を開催し、新しい活動を事務局と一緒に作り始めています。

すでに一部実施を開始したものには、以下のものがあります。

- (1) 多文化教育研究活動への助成
多文化共生に資する学生と教員の活動へ一定の補助を行うものです。これまで長く続けてきた「日本英語模擬国連」への参加などがその例になりますが、できるだけ多くの学生から多様な応募を求めています。
- (2) 語学検定試験検定料補助
これは外国語の検定試験を受ける学生の検定料を補助するもので、可否にかかわらず補助をします。あらゆる多言語に対応してまいります。
- (3) 多言語教育会議
静岡文化芸術大学の9か国の言語カリキュラムにかかわる担当者の意見や課題などを共有する場で6月に1回目の会議をもちました。
- (4) 外国にルーツをもつ学生へのアンケート
学生対象の大学一斉アンケートの中に、外国にルーツをもつ学生を意識した質問項目を加え実施しました。多多センターで活動する学生サークルSIB (Students with International Backgrounds) のメンバーにもヒヤリングの協力をお願いしています。

これからの活動予定は未確定のものもありますが、以下の通りです。

- (1) 多文化・多言語教育研究センター開設記念講演会
まだ内容は未確定ですが、11月頃に学内・学外むけに、開設を記念する講演会を検討しています。
- (2) 多言語スピーチコンテストの実施
多言語教育会議での検討を受け、学内の学生が参加できる多言語スピーチコンテストの可能性を検討中です。
- (3) 言語教科のカリ改に対する提案
2025年実施予定のカリキュラム改定に対して言語教育に関する提言をしていきます。
- (4) ICTを活用した協定校とのオンライン授業の検討
イズミル経済大学の日本語を学ぶ学生を対象に、オンラインの日本語授業の実施が可能か検討を進めています。
- (5) 日本語教育の基盤強化と地域連携の促進事業の検討
留学生や外国にルーツを持つ学生のための日本語教育の強化、地域の外国人の人たちの日本語学習のための大学としての役割の整理と事業展開、日本語教育ワーキングのメンバーで構想を検討中です。

ここまでと経緯と現状をお伝えしました。個人的には多多センターが、「全学的な活動の場になること」「地域とつながる場となること」を意識して、さらに精進していきたいと思えます。

欧州統合に対するポルトガル国民の反応

西脇 靖洋 (国際文化学科)

私はEU（欧州連合）とその構成国の一つであるポルトガルとの関係について関心を有しており、その一環としてポルトガル国民の欧州統合に対する反応についての研究を行ってきた。共同通貨ユーロの導入に代表されるように、EUはこれまで高度な政治統合を実現させてきた。そのようなEUが各加盟国の国民にどう認識されているのかという点は、国民投票による統合関連条約の批准や加盟国のEU離脱等、同機関のあり方に関わる重要問題に大きな影響を及ぼすことから、かねてより多大な注目を集めてきた。

EUの公式統計によると、欧州統合に対する市民の態度は加盟国間で大きく異なる。そのなかで、ポルトガルは同機関への加盟以来、絶えず「欧州」に対して新和的な感情を抱く国の一つとして認識されてきた。2009年のユーロ危機の発生以降、多くのEU加盟国内において「欧州懐疑主義」(Euroscepticism) と呼ばれる同機関への不信が高まった。

しかしながら、ポルトガルでは、EUに対する支持率は一時的に若干の低下が確認されたものの、他国ほどには著しい不信の高まりは見られなかった。ユーロ危機により最も深刻な経済不況に陥った国の一つであったにもかかわらず、2021年の統計においても、ポルトガルは全加盟国のなかで最も同機関に対して大きな「信頼」を寄せている国の一つであることが示されている。新型コロナウイルス問題についても、ポルトガル国民はEUが講じてきた諸施策に対して相対的に強い支持を表明している。

欧州懐疑主義に関する先行研究では、欧州統合に対する加盟国国民の反応の変化において最も重要なのは、「その時点」においてEUの制度や政策が各加盟国の社会経済にいかなる影響を及ぼしているかという点であると指摘されている。しかし、ポルトガルの事例からも明白のように、同要因だけでは懐疑主義の高揚を十分に説明できない。

このような背景から、私は「過去」、すなわち各構成国の「歴史」のなかで欧州統合問題が持ってきた意味に焦点を当て研究することとした。同研究では全国紙をはじめとしたメディアの役割を特に重視した。ある国において特定の歴史的事実に基づく「欧州統合観」がその国のメディアのなかで表象される。その欧州統合観は読者である国民の間でさらに浸透する。上記が繰り返されることにより、国民のEUに対する印象が加盟国ごとに大きく異なるのではないかと仮説を立てた。

ポルトガルは1933年から1974年にかけて独裁体制下に

あり、その間、欧州統合には参加しなかった。第二次世界大戦の終結後、欧州統合がフランスやイタリア等、西欧諸国間で開始された目的の一つには、同地域の内外におけるファシズムや共産主義の脅威から民主主義を守ることがあった。ゆえに既加盟諸国は、非加盟国が新たに加盟するための条件として民主主義体制を導入することを義務付けていた。そのため、独裁体制下にあったポルトガルは、同機関に加わることができなかった(独裁政権側も参加には否定的であった)。

だが、1970年代に入ると、「欧州」の一員となることは自国の経済的利益に合致するとして、ポルトガル国内において統合に参加すべきとの声が次第に高まった。その結果、民主化を求める動きが活発化し、1976年、同国は民主主義体制へと移行した。そして翌1977年、同国はEUの前身であるEC（欧州共同体）に加盟申請を行い、幾年にもわたる交渉ののち、1986年に加入を実現させた。

こうした政治体制の民主化に欧州統合問題が大きな影響を及ぼしたという歴史的経緯に基づく欧州統合観が各種メディアにおいて表象され、国民の間で定着したことから、ポルトガル国民の欧州統合に関する反応が他の国に比して好意的なものとなったのではないかと考えた。

以上の点について明らかにすべく、私はポルトガルを含む複数の加盟国を例にとり、ユーロ危機発生前後にそれら諸国国内において発行された主要全国紙や雑誌を調査し、欧州統合がどのような形で報道されているのかについて分析を行った。分析の結果、ポルトガルの新聞や雑誌は他の国々よりもEUを民主主義との関連性で論じる記事を掲載していることが判明した。また、ポルトガルの全国紙においては、「経済関連」以外の記事がより高い割合で検出された。これらのことから、欧州統合をめぐる歴史が、そののちの時代におけるポルトガル国民のEUに対する認識に多大な影響を及ぼしていることが理解された。

とはいえ、EUに関する一部研究によると、統合の進展に伴い、政治制度や社会経済構造のみならず、伝統的に多様であった各加盟国国民の価値観までもが次第に「収斂」してきているという。その意味では、各国民のEUに関する認識についても、(皮肉なことに懐疑主義的な方向へと向かうことになるかもしれないものの) 将来的には「欧州化」し、他の加盟国と同様のものへと変化するのかもしれない。したがって、今後はこの点についても検討を加えたいと考えている。

活動報告 SUAC Report

「文化」と「芸術」を客観視すること

田中 啓 (文化政策学科)

専門領域について

本誌のタイトルでもある「文化と芸術」を教育・研究の支柱に据える静岡文化芸術大学にあって、筆者は文化、芸術のいずれとも縁の薄い分野を専門領域としている。長らく取り組んできたのは政策評価に関する研究であり、これに加えて政策評価と関係性が深いことから、行政改革についての研究や実践活動も行ってきた。このため、文化や芸術というものを特別に意識せず、自己の関心や行政等からの要請に基づき、研究・実践活動に携わってきた。

誤解のなきよう付け加えれば、文化や芸術に関わる活動にこれまでまったく取り組んでこなかったわけではない。一部の例を挙げれば、静岡県文化振興基本計画の策定や静岡県立美術館の評価に参加してきたほか、浜松市が設置する博物館、美術館、音楽ホールなどの管理運営状況の評価にも関わってきた。さらには、浜松市文化振興財団が主催して市内の音楽ホールで開催する鑑賞型公演について、筆者が指導するゼミの学生が評価を行うプロジェクトを3年連続で実施したこともある。

このような例はあるものの、文化や芸術を自身の研究・実践活動の主戦場としてこなかったことは確かであり、その点では、本学の教員の中ではやや異質な存在と言えるかもしれない。これまでこうしたスタイルを取ってきたこともあり、文化や芸術を特別視せずに、むしろ一歩身を引いた場所に身を置き、これらを客観視することが自分の持ち味だと割り切っている。

自治体と文化・芸術をめぐる構図

ところで、このような視点から国内の自治体と文化・芸術との関係を眺めると、どのような構図が見えてくるだろうか。

令和2年度の決算数値によれば、自治体の財政硬直度を測る指標である経常収支比率の平均値は、都道府県が94.4%、市町村が93.1%となっている。経常収支比率とは、自治体の経常的収入（税収、交付税等の毎年決まって入ってくる収入）に占める経常的経費（人件費、扶助費、公債費等の毎年決まって出ていく支出）の比率である。経常収支比率が90%台ということは、家計に例えれば、毎月決まって入る給与収入のうち、9割以上の金額が食費、光熱費、教育費、住宅ローン返済等の使途に充てられることが既に決まっており、自由に使える分が1割未満しか残らないことを意味する。

一方、自治体の支出のうち文化や芸術に関連するものは文化関係経費と呼ばれる。文化関係経費は芸術文化経費と文化財保護経費を合わせたものである。このうち芸術文化活動に関連する芸術文化経費については、静岡県と浜松市において令和2年度の歳出総額（決算値）に占める芸術文化経費（国庫補助を含む）の割合は、静岡県では0.2%、浜松市では1.4%を占めるに過ぎない。

芸術文化経費には文化施設の建設費や管理運営のための経費が含まれる。こうしたハード面の経費が芸術文化経費の大半を

占めることから、文化・芸術の振興のために実施される各種のソフト事業だけに限定すれば、その経費が自治体の歳出総額に占める割合は微々たるものである（令和2年度において静岡県では0.07%、浜松市では0.05%）。

このように、自治体の財政は硬直化が進んだ結果、支出面の自由度が失われている。その上、文化政策に積極的に取り組んでいる（とみられる）静岡県や浜松市においてさえも、歳出のうち芸術文化経費に充てる割合はごくわずかである。かなり単純化して示したものの、これが自治体と文化・芸術の関係をめぐる現時点の一つの構図である。

特別研究について

今後は人口減少高齢化の影響が本格化するため、自治体の財政状況はさらに悪化する可能性が高い。人口減少高齢化が自治体の財政を悪化させるのは、歳入面では税収の減少、歳出面では主に高齢化に伴う医療・福祉関係の経費の増大のためである。また人口減少高齢化とは直接関係はないものの、自治体が保有するインフラや公共施設の老朽化が進んでおり、その維持補修や更新のために今後は多額の経費を要する見込みである。

こうした状況を放置すれば、今後少なからぬ自治体が財政悪化を主因として機能不全に陥り、基本的な行政サービスを提供することが難しくなる恐れがある。そこで、令和2年度から本学の教員特別研究費を受けて「持続的な地域社会を築くための自治体行政改革のあり方の研究」に取り組んでいる。本研究では、国内の自治体がこれまでどのような行政改革に取り組んできたかを把握した上で、自治体が将来的に直面するであろう事態を想定し、人口減少高齢化の影響が本格化した時代においても、自治体が財政状況を良好に保ち、組織や制度が有効に機能するような状態を維持していくために適した行政改革のあり方を構想することをめざしている。

さらに本研究では、人口減少高齢化が引き起こす問題に自治体を受動的に対応するだけでなく、自治体がAIの導入やDX（デジタルトランスフォーメーション）化に取り組むことにより、組織の効率性を飛躍的に高めることにつながるような能動的な行政改革のあり方も視野に入れている。

本研究の一環として、令和4年3月に国内の全自治体（1,788団体）を調査対象として郵送法によるアンケート調査を実施した。573団体（都道府県17団体、市区318団体、町村238団体）から回答を得ることができ（回収率は32.0%）、現在は回答結果の集計・分析を進めているところである。

本研究は令和4年度をもって一区切りとなる予定であるが、本研究が導く結果を踏まえたときに、人口減少高齢化時代における自治体と文化・芸術との関係をめぐり、新たにどのような構図が描けるかという点については、さらなる今後の研究課題である。

ヘンデル没後25周年記念祭 (1784)

— 近代音楽祭のモデルとして —

上山 典子 (芸術文化学科)

祭り、祝祭を意味する「フェスティバル」は、元々、宗教的な祭り（祀り）あるいは政治行事（政り）としての側面を持っており、そうした場を盛り上げるために音楽は常に重要な役割を果たしてきた。古代ギリシアやローマにおける祭典や祭祀、ルネサンス期の宮廷祝祭、そしてバロック時代の王侯貴族の宮殿で執り行われた彼らの権力誇示の象徴として祝典行事など、音楽を伴う祭典は人間の営みから国家行事にいたるまで不可欠であった。

本年度から科研費の課題、「19世紀ドイツの音楽祭研究——リストの改革と教養市民層の新たな文化構築」に取り組むことになった。1800年代を通してドイツ各地で興隆したさまざまな形の祝祭を取り上げ、これらに深くかかわった教養市民層の役割と彼らによる音楽文化の形成を追う。と言っても、この原稿を執筆している現在、本課題が決定してからまだ数か月しか経っていないため、今回は、こんにち「音楽祭」music festival [英]、Musikfest [独] と呼ばれるイベントの出発点になった近代の祝祭を紹介することにしよう。

宗教そして権力からも（ある程度）解放された近代的な意味での音楽祭が現れたのは、18世紀後半のイギリスだった。なかでも1784年にウエストミンスター寺院やパンテオンで開かれたドイツのハレ出身でイギリスに帰化したジョージ・ハンデル（ゲオルク・ヘンデル）Georg Händel（1685-1759）の没後25周年祭“Handel Commemoration”は、その後の大規模記念音楽祭のモデルとなったといわれる。

5月25日から6月4日までのおよそ10日間に5回開かれた記念祭のメイン・プログラムは、演奏に少なくとも2時間半を要するオラトリオ《メサイア》で、250名のオーケストラと総勢500名を超える合唱団員、4500人を超える聴衆という空前の規模で挙行された。オラトリオとは、教会の礼拝用ではないが、宗教的な題材を扱う劇的で大規模な叙事的楽曲のことである。この《メサイア》は1800年頃までに、国内外の音楽イベントでの演奏が定着した。なぜイギリスのみならず、19世紀ヨーロッパ各地の音楽祭の定番レパートリーになったのだろうか。

一般の人々が親しみを持てるような分かりやすい作品だったことに加えて、合唱が大きな役割を果たす点は決定的だった。混声四部から成る合唱隊には多くの場合、アマチュア合唱団の出番が求められたからである。市民階級が台頭してきたこの時期、音楽はもはや王侯貴族たちの宮廷の専有物ではなかった。社会では合唱団や合唱協会の設立が相次ぎ、その成果披露の場として愛好家たちは音楽祭で主体的役割を果たすようになった。合唱や演奏団員として晴れの舞台に立つこと自体が「祝祭」と化していったのだ。この点で《メサイア》は、市民参加型の最初期のレパートリーと言えるだろう。

《メサイア》がオペラではなくオラトリオだったことも、演奏が普及した大きな理由といえる。この作品はオペラに匹敵する華やかさと強い劇的要素を特徴とするが、しかしオペラよりもはるかに上演が容易というメリットがあった。特別な舞台装置、衣装、演技を伴うオペラ上演をプロフェッショナルの歌手なしで成立させることは極めて困難だが、演奏会形式であるならば、訓練されたアマチュアでも対応可能である。また設備の整った劇場でなくとも、場所さえ確保できれば——場合によっては野外でも——演奏は可能だった。実際、19世紀の祝祭における《メサイア》の演奏は、数百人から数千人の合唱規模を誇る市民主体の超巨大イベントと化していった。

また、宗教的題材に基づくオラトリオとして《メサイア》の主題は確かに救世主だが、それは超宗派的であり、三人称の語りによる進行はこの作品の客観的・普遍的要素を強めている。歌詞はむしろ倫理的かつ道徳的なものが多く、このことは道徳規範に価値を置くビクトリア朝時代の中流階級やドイツ教養市民層の大きな支持を得ることにつながったといえるだろう。（ドイツでは当初から原語の英語ではなく、ドイツ語訳版で普及した。）

今後は、このヘンデル記念祭をモデルとして発展した19世紀ドイツの音楽祭を考察していく。なかでも、市民の音楽愛好家が運営面でも演奏面でも中心的役割を担い、アマチュア演奏家（とくに合唱団）の参加型イベントを特徴としていた世紀前半から、演奏する「現代音楽」の難化に伴い職業音楽家の参入が一般化ようになる1850年代以降、教養市民層の役割が変化していく過程に注目していきたい。



1784年、ウエストミンスター寺院でヘンデル記念祭に出演するオーケストラと合唱団

活動報告 SUAC Report

デザインという私たちの旅、その羅針盤を求めて

— インタラクティブな発想による、日本の美意識の継承に向けて —

植田 道則 (デザイン学科)

地域連携室^{かた}の方から、「日頃どんな研究活動をされているか、書いてほしい」と原稿の依頼をされました。とは言うものの、昨年赴任したばかりの小生に、立派に語れる研究の成果等あるはずありません。ですが、敢えて語るとすれば、仕事として取り組んでいる建築やインテリアのデザインについて、この一年余りの思考の旅を振り返り、求めてきた“私たちの研究室らしいデザインの在り方”について、思いつくままに寄稿させていただきます。

私は、建築とインテリアにおいて、日本の美意識が育んできた内外空間デザインのあり方を、インタラクティブな発想を伴いながら探求することを研究室のビジョンとしています。ビジョン策定の背景には、本学でのインタラクション領域の先生方との出会いがありました。インタラクティブな発想は、従来の建築・環境領域をはじめ様々なデザインの分野に融合されてきた概念ですが、これまで自分が気づけなかったこと、或いは、気づいていても実際のデザインに表現することができなかったこととして、インタラクションの発想が現在のデザインの切り口となっています。

長嶋洋一先生は、インタラクションにおいて、システムと自然界に着目し、両者の間に介在する関係（インターフェースのデザイン）の存在を、捉えられています。（図1.）また、的場ひろし先生は、「電子回路やプログラミングによって実現される高度なインタラクションデザインが存在する一方で、そのようなものを使っていない素朴な

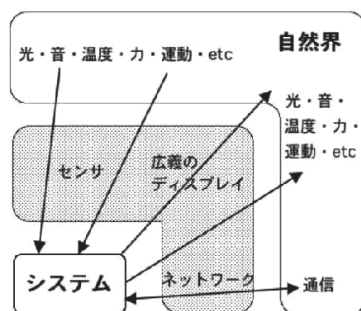


図1. 本学長嶋先生によるシステムと外界（自然）とのインターフェースのデザイン模式図

仕組みの中にも豊かなインタラクションデザインを見いだすことができる」とし、インタラクションデザインが広範囲の対象を視野に入れたものであることを示唆しています。私はこうした専門の先生方のインタラクションの考え方や捉え方に、様々なものがあることを興味深く思いました。そして、自らが関わってきた建築やインテリアの空間デザインに、仮説として、人間とその周囲にある環境（宇宙）は相互に作用し「環境の受容と働きかけ」が介在するものとしてそれをインタラクティブな環境系と捉えています。（図2.）この着想の起点は、建築・インテリアデザインの中心となる人間です。人間は、



図2. 人とのインタラクティブな関係の模式図

視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚と言われる五感によって、身の回りの環境、宇宙の存在を体感します。しかも、その人間は、民族、社会、文化等の様々な固有の属性をもち、環境や宇宙の受け止め方も異なり、豊かな日本の美意識の固有性の有り様の

解釈にもつながるものだと捉えています。研究室では、ゼミや授業を通じて、インタラクティブな環境系の有り方を模索しています。その中から、2つの実例を紹介しておきたいと思います。

インタラクティブな環境系の発想に大きな影響を与えているのは、インターネット技術の発達です。図3.は、修士1年の李根さんの作品で、2021年に行われた「人と人が“会う”空間」をテーマとした飲食店舗デザインコンペの応募案です。店内に



図3. 李根さん「LUCHTAコンペ」特別賞受賞案

半円型のブースが並び、ブース内注文で人との接触を減らしつつ、店内の客と画面のキャラクター越しに、10分間隔ランダムにチャット交流ができる出会いの気軽さや、ブース内でリアルタイムに遠く離れた人と対話可能なweb技術が盛り込まれたこと等が評価されました。コロナ禍で、webを用いた双方向のコミュニケーションは日常風景となったものの、“リアルに出会う”ことの本質を考えると、コンペテーマの解決策としては、まだ検討の余地はあると思います。

本年、本学およびクリエート浜松の二会場にて開催される展覧会「みらーと&SUAC障害者展」の会場構成を私たちの研究室で担当しています。詳細については、『文化と芸術 Vol.34』記載の文化政策学科小林淑恵先生の記事を読んでいたのですが、私たちは、この展覧会で、インタラクティブな環境系を知覚する五感のうち、視覚以外の感覚に着目したデザインを試みています。それは、コンセプト「風を創るひとたち展〜碧い翔け橋2022」の具現化として行った、竹を用いたインタラクションアート“風の音”です。（図4.）視覚重視の日常生活に、



図4. 竹を用いたインタラクションアート“風の音”

図4. 竹を用いたインタラクションアート“風の音”

デザインとは、思考の旅です。私は、デザインにおける教育者であると同時に、表現者としての旅人です。その上で、研究室のビジョン「建築とインテリアにおいて、日本の美意識が育んできた内外空間デザインのあり方を、インタラクティブな発想を伴いながら探求する」は、協業する人たちのデザインという旅の上での羅針盤の役割を担っています。試行錯誤が多いデザインで、結果としての制作の質を決定づけるのは、プロセスにおける思考の質だとも捉えています。今、私は、この羅針盤を、プロセスにおける各人の優れた思考を集団としての強いベクトルとして、機能させていくものであってほしいと願っています。

井川地区におけるビジュアルデザインの試行

佐井 国夫 (デザイン学科)

井川地区は、静岡市北部のオクシズと呼ばれる中山間地域の最北、大井川の上流域で南アルプスの玄関口、井川湖（ダム湖）畔に位置する、人口約400人の自然に恵まれた集落である。主産業の農林業の低迷を背景に、過去20年間で人口は半減、現在では高齢化率は約50%である。昔ながらの在来作物が数多く残されており、その数は120種以上と言われている。浜松からは、自動車利用で片道約3時間の道のりである。

ひょんなことから井川地区とのコミュニケーション回路が開かれ、学生プロジェクトの萌芽が見え始めたのは昨年8月のことである。何度かのやりとりの後、9月28日（火）に、まず私たち担当教員で井川地区を訪ね、静岡市井川支所担当者と打合せ、現地調査を行った。当初は特産品のパッケージデザインとお話であったが、現地で見聞きすると他にもデザイン課題が散見され、視野を広げてのテーマ探しから始める方向とした。

10月の後期授業開始とともに、佐井ゼミの3年生4名が参加して、総合演習Ⅰの枠内で学生プロジェクトがスタートした。井川地区の活性化に向けて、特産品パッケージを中心に置きつつも、井川地区のスタディーを通して、学生各々の問題意識のもと具体的なテーマを発見・構築し、ビジュアルデザインに取り組む方式とした。まずは文献資料（パンフレット等）やWEB情報を読み込むとともに、過年度のプロジェクト成果に目を通した。

11月10日（水）に、ゼミ学生参加で現地調査を行った。朝7時に大学に集合、大学公用車で出発、11時に井川に到着した。訪問先はアルプスの里（女性グループ運営の農産品加工施設・直売所）、ビジターセンター（公営の観光案内所、軽食・土産物販売）、井川のらり屋（移住者夫婦の雑穀クッキー工房）、井川湖渡船待合所（リニューアル予定）などである。調査終了後、現地を16時に出発、大学には19時過ぎに帰着、けっこう強行軍であった。先々では事業当事者から現状・課題、考え方などを直接聞くことができ、ゼミ学生にとっては実社会を肌で感じる貴重な機会になった。

現地調査を終えて11月中は学生各々がテーマ設定の時期。12月から1月にかけて、地理的制約もあってメール・電話を介して井川地区関係者からの追加情報収集、そして他地域の先進事例調査、アイデア・スケッチ展開、ラフ模型の制作、ゼミ内での討議・検討などを経て、1月末に学生各々がデザイン提案をとりまとめた。各学生のテーマと概要は次の通りである（①～④、50音順）。

①芋径（ずいき）のパッケージ提案（會田創士）： 井川地区の土産物の一つ「芋茎」に着目し、芋茎の魅力が観光客に伝わるよう、イメージイラスト、ロゴマークを制作し、芋茎のパッケージデザイン案を作成した。

②新渡船場へのデザイン提案（落合侑美）： 「渡船待合所」リニューアルに向け、観光客・地域住民に親しめる施設愛称（いかわさん）、ロゴマーク、井川銘菓のパッケージ、ペーパーバッグ等のデザイン案を作成した。

③アルプスの里VI計画（窪田帆ノ香）： 農産物加工所「アルプスの里」の魅力を発信できるロゴマーク、売場・商品の統一感をつくれる看板、パッケージシール等のデザイン案を作成した。

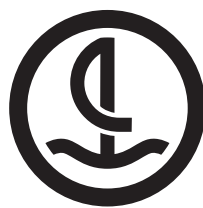
④井川のらり屋のブランディング（福本拓）： 雑穀クッキー店「井川のらり屋」の農業との向き合い方を伝えるロゴマーク、製品パッケージのデザイン案を作成した。

そして2月9日（水）、静岡市林業センター（静岡市葵区千代）で最終報告会を行った。当日は、静岡市・井川支所関係者、井川地区事業者には学生のデザイン提案が新鮮に受け止められ、質疑応答も活発に行われた。また、提案のいくつかについては実現に向けての話題も交わされた。その中で落合の提案した新渡船待合所のロゴマークに関しては、4月29日（金）の新待合所のオープニングに3案を披露し、町民投票で決定した。6月現在、投票を終えデザインの最終調整、法的対応の途上である。ゼミ学生にとり実践的成功体験は貴重であり、喜ばしいことでもある。

このプロジェクトは本年度も継続されることとなり（ふじのくに地域・大学コンソーシアム「ゼミ学生地域貢献推進事業」申請中）、4年生になったゼミ学生はテーマを深化させ卒業制作に取り組みを始めている。来年2月の成果発表が楽しみである。尚、このプロジェクトは黒田先生（現・本学名誉教授）の協力を得て実施されたことを申し添えておく。

ポジティブ

ネガティブ



新井川湖渡船待合所ロゴマーク

活動報告 SUAC Report

カスカラティー認知向上のためのデザインによる イメージ形成提案

日比谷 憲彦 (デザイン学科)

本項は、国際文化学科の武田淳准教授と共同で推進した「コーヒーの廃棄物を活用した新たな食文化創造プロジェクト」のデザインによるアプローチ部分を報告するものである。



カスカラ

1. 前提認識・カスカラとは

コーヒー豆は、コーヒーの木に成るコーヒーチェリーという実の種子の部分にあたる。種子を取り除いた果皮などはこれまで大量に廃棄され環境問題に発展することが危惧されてきた。カスカラとは、このコーヒーの果皮を乾燥させたものであり、一部の生産国でカスカラティーとして飲まれてはいたが、日本の市場に出回することは稀であった。しかし昨今、SDGsの一環でコーヒー廃棄物有効利用の機運が高まり、加えてカスカラに含まれる健康成分が注目されるなど、無用を有用に変換する「アップサイクル商品」としてカスカラはクローズアップされつつある。

2. カスカラティーのイメージ形成方針の検討

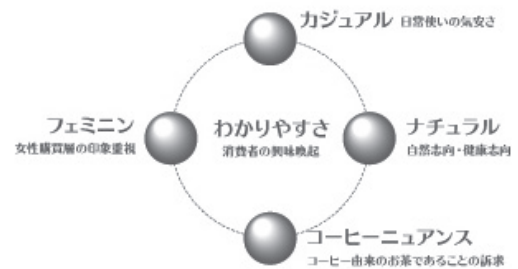
カスカラティーを本学が扱うフェアトレード商品として市場導入するという目標を掲げ、両学部を交えたプロジェクトチームが発足し作業が進められた。カスカラティーは新種の商品であり、デザインによる明解なイメージ形成が認知を促し市場定着への戦略となる。第1段階としては、カスカラの特性と訴求ポイントを抽出しつつ、ハーブティーなどの周辺商品の現況イメージを概観する中でイメージ形成の基本方針を検討した。その結果、カジュアル（日常使いの気安さ）、ナチュラル（自然志向・健康志向）、フェミニン（女性購買層の印象重視）、コーヒーニュアンス（コーヒー由来であることの訴求）、というイメージ照準の4つのキーワードを設定した。

3. パッケージやポスターなどの具体的なデザイン展開

デザインは、ブランドネームのロゴシンボル、パッケージ、商品解説リーフレット、広報用ポスターなど複数の媒体を対象とし、トータルデザインによるイメージの醸成を目指すものとした。前述のようにカスカラティーは、現時点では認知度の低い新種の商品である。したがってパッケージや広報物などの情報発信において重要なのは、カスカラとは何かをわかりやすく伝えることである。これを大前提として、検討段階では4つのイメージ照準に照らして様々なデザイン案に対する精査が行われた。結果として2種のパッケージを含む多様なアイテムが最終成果としてまとめられた。



ハーブティーパッケージのイメージ分布



イメージ照準

4. 今後の取り組み

試飲会などを経て、現在カスカラティーは本学生協や県内のフェアトレードショップでの発売に至っている。焙煎や袋詰めはこれまで学内で対応してきたが武田先生のご尽力により委託業者への移管が可能となった。今後は商品ラインナップの多様化にともない、ショップ側の意向を反映した簡易パッケージの開発など、デザインのバリエーションを検討していくことになる。



デザインアイテム各種

令和3年度 文化・芸術研究センター事業実績

<公開講座の開催>

公開講座名		概 要
前期オンライン公開講座「匠とデザイン」		収録日時：令和3年7月3日 収録会場：静岡文化芸術大学 講堂 配信期間：令和3年8月3日～12月24日 内容：第1部 基調講演「伝統技術の技～松ヶ岡の建築から」 講師：浜野 豪（京都伝統建築技術協会 伝統建築研究所） 第2部 トークセッション「伝統建築の技の継承」 出演：浜野 豪 曽根 秀一（静岡文化芸術大学 文化政策学部 准教授） 新妻 淳子（静岡文化芸術大学 デザイン学部 准教授） 再生回数：221回
後期公開講座／シンポジウム 「ミュージアムは誰とつながるのか ー過去・現在・未来」		日時：令和3年11月14日 会場：静岡文化芸術大学 講堂 内容：第1部 基調講演「コレクションは移動し、根づき、芽を吹く」 講師：木下 直之（静岡県立美術館 館長） 第2部 パネルディスカッション 出演：木下 直之 植松 篤（静岡県立美術館 学芸員） 増井 敦子（浜松市美術館 学芸員） 田中 裕二（静岡文化芸術大学 文化政策学部 准教授） 司会：立入 正之（静岡文化芸術大学 文化政策学部 教授） 来場者数：140人
「風の記憶2021 ー山本一樹退任記念展」 公開講座	ギャラリートーク	日時：令和3年11月13日 会場：静岡文化芸術大学 ギャラリー 内容：第1部 ギャラリートーク 講師：山本 一樹（静岡文化芸術大学 デザイン学部 教授） 第2部 卒業生を交えたギャラリートーク 出演：山本 一樹 山浦 陽介（陶芸家 静岡文化芸術大学卒業生） 前田 直樹（ジュエリー作家 静岡文化芸術大学卒業生） マノミホ（鍛金作家 静岡文化芸術大学卒業生） 来場者数：60人
	トークセッション	日時：令和3年11月28日 会場：静岡文化芸術大学 ギャラリー 内容：トークセッション 出演：山本 一樹（静岡文化芸術大学 デザイン学部 教授） 藤井 尚子（静岡文化芸術大学 デザイン学部 教授） 荒川 朋子（静岡文化芸術大学 デザイン学部 准教授） 小田 伊織（静岡文化芸術大学 デザイン学部 講師） 司会：新妻 淳子（静岡文化芸術大学 デザイン学部 准教授） 来場者数：30人

<文化・芸術セミナーの開催>

文化・芸術セミナー名		概 要
室内楽 演奏会 2021	スペインの風ーフラメンコの 音楽と舞踊ー	令和4年1月開催予定 → 延期
	シリーズ音楽の力 つなぐ 奄美のシマ唄・島唄	日時：令和4年3月5日 会場：静岡文化芸術大学 講堂 内容：レクチャー&コンサート 出演：新元 一文（(一社)巡めぐる恵めぐる代表） 麓 憲吾（(有)アーマイナープロジェクト／ROADHOUSE ASIVI代表取締役 NPO法人ディ！代表理事） 村松 健（ピアニスト、作曲家、三味線弾き） 司会：梅田 英春（静岡文化芸術大学 文化政策学部 教授） 来場者数：124人

＜研究活動における地域交流＞

イベント・シンポジウム名	概 要
第7回産学共同国際デザイン ワークショップ	期間：令和3年9月6日～9月10日 会場：舞阪協働センター、静岡文化芸術大学構内 内容：学生が国境を越えてチームを組んでデザイン提案を行うワークショップ 参加学生：静岡文化芸術大学 13人 トルコ・イズミル経済大学 6人 ポーランド・ワルシャワ芸術アカデミー 5人
「ポスターに見る20世紀 1945-1990」 展示イベント	期間：令和3年10月1日～（常設展示） 会場：静岡文化芸術大学 図書館・情報センター 内容：本学に保存されているポスターコレクションの展示、グラフィックデザインの変遷とともにその社会背景等を学ぶ
「風の記憶2021ー山本一樹退任記念展」 同時開催：山本ゼミ卒業生作品展	会期：令和3年11月13日～11月28日 会場：静岡文化芸術大学 ギャラリー 内容：教員及び卒業生の作品の展示 来場者数：863人
Discover Classic Cars ～アナログデザインの神髄を学ぶ～	令和3年11月開催予定 → 延期
浜松市の中山間地域再生の可能性と課題についての シンポジウム 「2022まちむらリレーション市民交流会議 ～浜松の中山間地域の可能性を考える～」	収録日時：令和4年1月22日 収録会場：浜松市地域情報センター 主催：浜松市、静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター 内容：第1部 基調講演「移住・定住と地方創生～全国の移住動向からみえる地域づくり～」 第2部 クロストーク「地域住民と移住者による地域づくり」 第3部 クロストーク「大学生が中山間地域を考える！」 再生回数：586回
メディアデザインウィーク2022	1.学生作品の展示 日時：令和4年2月3日～2月8日 各日12:30～18:00 会場：静岡文化芸術大学 ギャラリー 来場者数：159人 2.特別講演「現代アニメーション事情」 講師：月岡 貞夫（アニメーション作家・教育者） 日時：令和4年2月7日 14:40～16:40 会場：YouTubeによる配信（収録：静岡文化芸術大学 南281中講義室） 視聴者数：177人 3.ワークショップ 講師：長嶋 洋一（静岡文化芸術大学 デザイン学部 教授） 日時：令和4年2月13日 10:00～17:00 会場：Zoomによる参加（収録：静岡文化芸術大学 マルチメディア室） 参加者数：10人

＜特別公開講座の開催＞

講座名	概 要
第20回特別公開講座「薪能」	令和3年10月開催予定 → 中止 代替イベントの開催 「薪能2021乱能ー狂言」 1.展覧会「あなたもお能が見たくなる 能楽ことはじめ」 会期：令和3年11月29日～12月8日 ※土日は休み 会場：静岡文化芸術大学 総合演習室 来場者数：100人 2.狂言公演「伝説と新奇」 日時：令和3年12月6日 会場：静岡文化芸術大学 講堂 内容：第1部 狂言「因幡堂」 第2部 乱能狂言「梟山伏」 第3部 アフタートーク 来場者数：50人

※上記実績報告における教職員の職名は、令和3年度の当時のものを記載しています。

「視覚芸術と空間／美術と美術館 ー 南條史生、藤原工、榊田倫之」@SUAC

立入 正之 (芸術文化学科)

【《美術》講座】

2022年11月と12月に、静岡文化芸術大学で、「美術」に関わる人と現場の最前線を紹介する連続講座を開講する。

テーマは「アートを生きる、アートを生かす、アートを見せる」、いずれもイブニング・レクチャーである。

静岡文化芸術大学ではこれまで、「アーティストをささえる」さらには「芸術文化をささえる」現場の第一線で活躍する、各界専門家の話を聴く講座を開催してきた。そのひとつ、2019年12月に『調律師・村上輝久のレクチャーとピアノ・コンサート』を開催したが、村上輝久氏には「音楽（ピアニスト）」を裏方として支える立場と経験から、御登壇いただいた。

【美術を取り巻く環境】

2020年春から、新型コロナ・ウィルス禍（Covid-19）の影響により、アーティストの活動は大きく制限された。美術館も休館となり、作品の輸送も限定され、美術家や美術館を取り巻く環境は大きく変化している。しかしそのような中で、美術に関わる人たちは、新たな活動形態を模索し、少しずつ実現しつつある。その成果は、2021年以降の美術館の入館者数と開館日数に顕著である。2020年は、一時閉館や計画変更を余儀なくされたため、ほぼすべての美術館で入館者数と収入が激減したが、2021年には、徐々に回復していることは、今後の芸術活動において明るい話題であろう。

静岡文化芸術大学においても、2019年までは、音楽、演劇、建築、デザインなど、多様な芸術に関わるさまざまな人を講師として、講演や講座等の公開イベントを開催して、いずれも好評を得た。

しかしCovid-19のため、2020年と2021年には芸術講座の開催は実現しなかった。

2022年の今年、南條史生、藤原工、榊田倫之の各氏を招き、「美術（画家、作品、空間）」を裏方として支える現場の最前線に主眼を置いて、「連続講座《美術》」を開催する。ハイライトは、「南條の〈アートを生きる〉、藤原の〈アートを生かす〉、榊田の〈アートを見せる〉」である。なお、南條史生氏は特別授業講師、藤原工氏は本学非常勤講師として、それぞれ本学との関わりが深い。

【学生参画】

Covid-19では大学においても、いわゆる「密」となる参集

や対面による活動は、授業でさえも例外なく、ままならなかった。このような状況下では、限定された空間で同時に作業可能な人員の数は、極めて少なくかつ厳しく制限され、よって対面によるイベントの企画や運営活動の多くは中止あるいは延期となった。

この公開講座も当初の開催予定から延期とはなったが、今回の開催に当たっては多くの学生の参加を期待したい。学部学科は問わないが、芸術イベントの企画運営、および教育普及活動（ワークショップ等）に関心のある学生、プロフェッショナルの仕事に接したい学生の参加を求める。

参加をする学生には、より充実したイベント実現のため、他のレクチャーやアート・イベントを積極的に聴講や体験をして事前調査をおこない、当該事業に生かしてもらいたい。

第一線の美術人との関わりを、学生メンバーにとって極めて貴重な実践と交流の場として、学生がアイデアや方法を積極的に発信し、採用することで、プロフェッショナルの大いなる活動と精密な仕事に接し、同時に厳しさを学ぶことができる機会となろう。

2019年10月に、日系ブラジル人写真家ジュニオル・マエダ氏の写真展『デカセギ ブラジル ー ジュニオル・マエダが見た30年』を、静岡文化芸術大学ギャラリーで企画開催した際には、学生は写真という芸術の一ジャンル 작품을展示紹介しつつ、マエダ氏のギャラリー・トークやワーク・ショップの運営をおこなった。

今回のイベント（公開講座）には、実物展示ではなく、より広範にアートという「概念（環境）」を紹介・発信をして人々に共感してもらうための現場を体験する目的もある。つまり、アート・マネジメント、美術経済、美術現場の実際を見せるということでもある。

レクチャー当日の対談テーマや内容は、講師各氏、本学担当教職員、学生スタッフが、対面や遠隔でのミーティングを重ねて方向性を見いだしたい。

各講師やマネージャー等スタッフとのイベント事前打ち合わせや、イベント当日のアテンドも、教職員指導のもと、学生の積極的な参画をうながし、学生スタッフが主たる役割を担う。イベントの広報材料（チラシ・ポスター等）、動画静止画撮影も学生スタッフがおこなう。芸術イベントを裏方で支えるアート・マネジメントの実践になることを期待したい。

【講師紹介】



南條 史生
(なんじょう ふみお)

第1回講座「アートを生きる」

【講師】 南條史生〈森美術館特別顧問・エヌ・アンド・エー株式会社代表取締役〉

【日時】 令和4年11月11日（金） 18：30～20：30

慶應義塾大学経済学部（1972年）、文学部哲学科美学美術史学専攻（1977年）卒業。国際交流基金（1978～1986年）、ICAナゴヤ（1987～1990）を経て、1990年ナンジョウアンソシエイツ（現エヌ・アンド・エー）設立。2002年より副館長として森美術館設立に参画、2006年11月から2019年まで館長、2020年1月より特別顧問。国際的には、ヴェニス・ビエンナーレ日本館（1997年）、台北ビエンナーレ（1998年）、横浜トリエンナーレ（2001年）、シンガポール・ビエンナーレ（2006年／2008年）、茨城県北芸術祭（2016年）、ホノルル・ビエンナーレ（2017年）、北九州未来創造芸術祭-ART for SDGs-（2021年）等のディレクターを歴任。著書に「アートを生きる」（角川書店、2012年）等がある。



藤原 工
(ふじわら たくみ)

第2回講座「アートを生かす」

【講師】 藤原工〈美術照明家、照明デザイナー、(株)灯工舎 代表取締役〉

【日時】 令和4年11月25日（金） 18：30～20：30

美術照明家・光文化研究家・照明デザイナー、(株)灯工舎代表。姫路出身。1991年筑波大学芸術専門学群卒業。パナソニック電工（株）でテーマパーク・建築（主に美術館・博物館）の照明デザイン、コンサルティングに携わり、2011年退社。2012年、灯工舎を設立。全国の美術館・博物館や寺社仏閣の照明コンサルティングのほか、正倉院展～現代アート、古今東西のあらゆる分野の展覧会のライティングを行う。静岡文化芸術大学・金沢美術工芸大学・武蔵野美術大学・岡山県立大学非常勤講師。



Photo: Masahiro Sambe

榎田 倫之
(さかきだ ともゆき)

第3回講座「アートを見せる」

【講師】 榎田倫之〈建築家・(株)新素材研究所 代表取締役〉

【日時】 令和4年12月16日（金） 18：30～20：30

1976年滋賀県生まれ。建築家。2001年、京都工芸繊維大学建築学専攻博士前期課程修了後、株式会社日本設計入社。2003年、榎田倫之建築設計事務所設立後、建築家岸和郎の東京オフィスを兼務する。2008年、現代美術作家・杉本博司と新素材研究所を設立。現在、榎田倫之建築設計事務所主宰、京都芸術大学非常勤講師、宇都宮市公認大谷石大使。杉本博司のパートナー・アーキテクトとして数多くの設計を手がける。2019年、第28回BELCA賞など受賞多数。

第1～3回（共通）

【主催】 静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター

【会場】 静岡文化芸術大学 講堂（250名）

【聴講等】 入場無料（要事前申込）

※申込方法については、別途、静岡文化芸術大学公式Webサイト等を通してお知らせします。

【司会】 立入正之（静岡文化芸術大学教授）

【対談】 梅若猶彦
(静岡文化芸術大学教授)



【開催概要】

南條史生氏、藤原工氏、榎田倫之氏の3講師のレクチャーを各回講座の前半に、講師と梅若猶彦教授（芸術文化学科）との対談を後半におこなう。講師の経験とアーティスト作品の紹介を交えながら、広く発信するイベントで、学内外の多くの人々を対象として、本学講堂で開催する。

世界の第一線で活動する、キュレーター、照明デザイナー、アーキテクトの講演と実演を提供することは、地域貢献と地域連携の絶好の機会ともなる。

講師各氏やアーティストとの開催打ち合わせや、イベント開催日のアテンドは、教職員とともに、学生の積極的な参画をうながし、開催当時の主軸は学生スタッフとなることを目的とする。

イベントの広報材料（チラシ・ポスター等）制作、動画静止画撮影も学生スタッフがおこなう。芸術イベントを裏方で支えるアート・マネジメントの実践になることを期待する。

また、本連続公開講座は地域社会の人々へ積極的に開放することも目的とする。

静岡文化芸術大学公開講座

「鉄」の伝来と「木」の文化—日本の文化を創り伝える

新妻 淳子 (デザイン学科)

日本の文化と芸術の中で継承されてきた「ものづくり文化」と大地の恵み「素材」について学び、文化の継承と新たな創造へ繋げる匠公開講座を2018年度から開催してきました。2022年度は、伝統建築に用いられてきた「鉄」と「木」という素材に着目し、「鉄」の伝来と「木」の文化について、全国的な動向を踏まえながら、静岡県の文化を見つめ直し、日本の文化を創り伝えることについて考えます。

公開講座の第一部では、ユーラシア大陸から伝来した鉄器の研究者である愛媛大学アジア古代産業考古学研究センター長の村上恭通教授をお迎えし、「鉄の伝来と日本の文化」について基調講演をいただきます。第二部は、「鉄の伝来と木の文化」をテーマに掲げ、「大工道具と木の建築」について麓和善氏から、「静岡県の鉄の文化と木の文化」について鈴木一有氏から、「復元道具から見える文化」については鍛冶白鷹興光氏からお話しいただき、日本の生活文化を豊かにした鉄器、それによって発展した木の文化についてディスカッションを行います。日本の「ものづくり文化」について理解を深め、未来へ創り伝えることを考えます。

実演公開では、鉄の匠「鍛冶」によって作られた「釘」を、木の匠「大工」がどのように建築に使ってきたのか、匠の技とその連携を知り、文化財の保存や技術継承、日本の「ものづくり文化」を未来へ繋ぐ意義について考えます。

【日 時】令和4年12月10日(土)・11日(日)
【場 所】静岡文化芸術大学
【主 催】静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター
【後 援】静岡県・浜松市

【公開講座】「鉄」の伝来と「木」の文化—日本の文化を創り伝える
＜日 時＞12月10日(土) 12:30開場、13:00～16:00
＜第一部＞基調講演「鉄の伝来と日本の文化」村上恭通(愛媛大学 アジア古代産業考古学研究センター教授)

＜第二部＞パネルディスカッション「鉄の伝来と木の文化」
登壇者：村上恭通、麓 和善(名古屋工業大学名誉教授)、鈴木一有(浜松市 創造都市・文化振興課)、白鷹興光(鍛冶)
司 会：新妻淳子(静岡文化芸術大学准教授)

＜場 所＞静岡文化芸術大学 講堂

＜募 集＞200名(要事前申込・無料)

【実演公開】匠の技を知る「和釘を打つ！」

＜日 時＞12月11日(日) 9:30受付、10:00～12:00

＜内 容＞和釘を作る 白鷹興光(鍛冶)

和釘を使う 月原光泰(大工)

＜場 所＞静岡文化芸術大学 金属工房、構造実験室

＜募 集＞30名(要事前申込・無料)

※お申し込み方法については、静岡文化芸術大学公式Webサイト等でお知らせいたします。

室内楽演奏会2022 「スペインの風—フラメンコの音楽と舞踊」

梅田 英春 (芸術文化学科)

本年12月3日(土)、室内楽演奏会2022として、フラメンコをテーマにした「スペインの風—フラメンコの音楽と舞踊」と題したレクチャーコンサートを実施します。もともと本企画は、2019年度の学生が企画し2020年度に開催の予定でしたが、感染症の影響もあり2年越しの開催となりました。企画をした学生は卒業してしまいましたが、その意思を引き継ぐ形で今年度の学生チームが準備・運営します。

室内楽演奏会は、弦楽四重奏などの室内楽を上演することから始まりました。その後、民族音楽学を教える私が監修者になったことで対象の音楽を「世界音楽」へと広げ、「室内」で演奏されるさまざまな音楽をレクチャーとコンサートの二本立てで行う演奏会へと変わっていききました。

今回のテーマであるフラメンコはスペインの民俗舞踊の一つで、インドから長い時代をかけてヨーロッパに移動した人々の音楽文化とスペインの音楽文化の融合がもたらした独特な芸能です。その情熱的な舞踊は世界中の人々を魅了してきました。また音楽は独特な奏法で知られるフラメンコ・ギターに加え、パルマとよばれる手拍子が特徴的です。さらにはアジアとの繋がりを感ぜさせる歌の発声や旋律も聴きどころです。

今回は、平成20年度「浜松市ゆかりの芸術家顕彰」を受賞されている浜松市在住の世界的なフラメンコ舞踊家である大塚友美氏のグループにご協力をいただいて演奏会を実施します。大塚氏は東京での上演活動や指導のほか、浜松を生活の拠点として、フラメンコ舞踊家の育成も積極的に行っています。大塚

氏のほかにも、ギタリストの鈴木尚氏、舞踊家の三枝雄輔氏をはじめ、多くの演者が加わります。

コロナ禍の中、世界中でニューノーマルなコンサートの在り方が模索され続けています。この数年でオンライン配信の技術は格段に向上した一方で、リアルなコンサートも行われるようになっていきます。本レクチャーコンサートにおいて、観客の「オーレ」という大きな掛け声はまだまだ聞くことができないかもしれませんが、本学においてもアフターコロナの新しいコンサートの在り方に挑戦しつつ、本公演に取り組んでいきたいと考えています。

Art & Culture

イノベアート

文化・芸術研究センター
ニュースレター

Vol.36

September 2022

発 行：静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター
(事務局 静岡文化芸術大学 地域連携室)